

『いろは文庫』の英訳② — 齋藤修一郎と「忠臣蔵」の密接な関係

2013年1月5日 日本英学史学会本部例会

川瀬健一

1 : 問題の所在 : 『いろは文庫』英訳の意図

1) 齋藤が「忠臣蔵」を選んだ理由

齋藤修一郎はアメリカで日本の文学を英訳しようとした際に、為永春水の『いろは文庫』を選んだ理由として、英訳本の序で述べたことは、要するに

- ① 為永春水が最も人気のある作家の一人だから。
- ② 『いろは文庫』で描かれた話は、封建制度の下での、武士は主君のために命を投げ出さねばならないという封建道徳に縛られた状態を良く説明しているから。
- ③ 「主君のための仇討ち」には、愛国心の起源を含んでいるから。

の三点であったというのだ。

2) 木村毅の考察

では、最初に『いろは文庫』の英訳版を紹介し考察した木村毅は、この点をどう論じていたのか。

木村は『日米文学交流史の研究』で次のように述べた（初版は1955年。1982年恒文社版p332）

忠臣蔵は日本人の何より気に入る歴史物語で、事実そのものにも、又これを好むということの中にも、吾が国民の特性は最もよく現れるのだから、これを選んだことは極めて至当である。しかし『いろは文庫』が、この話をつたえるのに果たして最も適当であったかどうかは疑問であるし、さらに齋藤が為永と馬琴をもって日本文学の *foremost* と序文で述べているのは、馬琴はとも角として、為永にたいしてはいささか過大な評価であるだろう。（中略）ただその頃の青年学生は、自国文学の中で馬琴と春水を最も耽読した。この消息は、徳富蘆花の『黒い眼と茶色の眼』という小説を読んで分る。（中略）齋藤はそうした自分の経験から、春水と馬琴を近世日本の二大小説家と考え、そう書いているとしても大して咎められるべきではあるまい。

近世文学史の知識不足のため、木村の評価が妥当かどうかを判断する知識を私は持たない。

分ることは木村が、齋藤が述べた理由の①についてだけ論じ、「仇討ち」の歴史的な評価に踏み込むことは避けていたことだ。そして①についての木村の判断は、齋藤が為永春水の『いろは文庫』を選んだ理由を、当時の青年が馬琴と春水を愛読する傾向があり、「忠臣蔵」は「国民的文学」だから、とうぜん齋藤も子どもの時から「忠臣蔵」に慣れ親しみ、春水の『いろは文庫』も読んでいたに違いないと考えたことだ。

この点は、木村が前掲書と同じ頃に東京の毎日新聞に連載していた「大東京500年史話」（1956年1月～6月）の中の「誨淫小説の役割」のなかで、齋藤がこの本を選んだ理由として、

『いろは文庫』は彼の祖母の愛読書で、幼いときからその膝の上ののせて話して聞かされ、学童となつてからは自分でくりかえして読んで、暗記するほど読んでいたのである。（『大東京五百年文化史話—開けゆく江戸から東京へ』1979年恒文社p236）

と述べていることと同じである。

ここで木村が、齋藤はおさないときから祖母の膝の上で聞かされた話だと判断した根拠は、ロイ

ヤル・ローニンズに「著者はしがき」としてこのような話が載せてあるからだ（資料1参照）。

この序では「これらの登場人物を描いた江戸の年をとった男：為永春水」のことを考えるなど書かれ、このような序は『いろは文庫』には存在しないことから、木村は、これを齋藤自身の言葉だと判断し、彼の実体験に基づいたものと判断したことによるのだろう。先に見たように木村が、齋藤修一郎が『いろは文庫』に慣れ親しんでいたと判断した根拠の一つが、「著者はしがき」にあることは明らかである。

これが事実かどうか判断する直接的な史料は存在しないが、大いにありうる話である。

なぜなら以下に述べるように、齋藤修一郎が所属していた、越前府中本多家と赤穂藩浅野家およびその家臣と、実際の「赤穂事件」とは極めて密接な関係を持っていたので、府中本多家の家中では、他の藩以上に、「忠臣蔵」が愛好されていた可能性が高いからである。

1：越前府中本多家と「忠臣蔵」との密接な関係

1) 越前府中本多家とは

この家については、最後の本多家の殿様の本多副元が、明治に自分を華族にと訴えた際に出した由緒書が雄弁に語っている（資料2参照）。

要するに越前府中本多家は

- ① 徳川家康の次男結城秀康が越前太守に任じられた際に、家康の命でその付家老の本多富正を越前府中城に置き、3万9千石を与えた（その後2万石に減知）。
- ② 以後代々、越前福井松平家においては、府中本多家は、家老の上に置かれた特別な家柄で、府中を代々治めてきた。
- ③ 幕府からは諸侯（大名）並の取り扱いを受け、江戸屋敷を賜り（浅草鳥越⇒本所台所町）、江戸城登城の際には、詰め所は柳の間（譜代大名の詰め所）で、江戸屋敷には大名と同様に火の見櫓や出番所・見張所を設け、大名火消しの役も勤めていた。さらに参勤交代の際の行列の格式も大名なみである。

としている。

言い換えれば、越前府中本多家は、水戸徳川家や尾張徳川家、紀伊徳川家においてそれぞれに付家老家が置かれた。それらと同格の家だと言うことである。

※付家老とは？⇒それぞれ幕府からの目付として、親藩を監視指導する役目を負っていた。

2) 越前府中本多家と赤穂藩・「赤穂事件」との関係

- ① 本多の江戸屋敷は、殿中刃傷事件の後に吉良上野介が移った本所の屋敷の隣（資料3参照）。
- ② 本多家家中と赤穂藩士との個人的な関係。

・堀部弥兵衛の妻一府中本多家家臣忠見扶右衛門の妹（資料4参照）

※堀部弥兵衛：赤穂藩江戸留守居 忠見扶右衛門：府中本多家江戸留守居

このため、本多家には

- ① 赤穂浪人討ち入りに際しては、堀際に高提灯を出して援助との逸話（土肥慶蔵『鶚軒遊戯』1927年改造社、p47 真柄の手柄）
- ② 本多家家中に「義士」武林唯七の「しころ頭巾」が伝わる（土肥前掲書 p47・8）
- ③ 江戸留守居の忠見家には、堀部安兵衛の書置きと討ち入りに使った鍵、討ち入りの際の配置の絵図面が残された（資料5参照）。

※この資料で興味深いこと

堀部安兵衛を「忠見家から堀部家に養子に入った」としていること。

安兵衛親類書では、実家は越後新発田藩溝口家の中山弥次兵衛家。これは府中本多家には、安兵衛は「忠見扶右衛門の弟」だとの言い伝えがあったことによる（資料6参照）。

よって越前府中本多家家中には、赤穂藩浅野家と「赤穂事件」への特別の感情があったものと思われる（家臣が本多家御文庫にあった『赤城義臣伝実記』を筆写した話）。

従って齋藤修一郎が幼少時より「忠臣蔵」に親しんでいた可能性は大であり、幼き日の修一郎は「赤穂義士」へ憧れていたことであろう。

2：齋藤修一郎自身の「忠臣蔵体験」一本多家家格回復問題・武生騒動

だがこれ以上に重要なのは、齋藤自身と本多家家中が「忠臣蔵」と同様に、主君のために命を投げ捨てなければならぬ事態に直面し、多くの死者と家財を失う体験を持っていたことである。

それが1869（明治2）年に起きた本多家家格回復問題と、翌1870（明治3）年に起きた武生騒動である。この本多家家格回復問題が解決したことが、齋藤修一郎をして「忠臣蔵」を英訳させた直接の動機であったと考える。

1）本多家家格回復問題と武生騒動とは

明治2年の版籍奉還に伴い、福井藩は本多氏に対して、府中領2万石の領有権を取り上げて、本多氏を士族とし、本多家家中が250年に渡って行ってきた施政権を接収した。そして本多家家中のうちで物頭以上のものは士族としたが、それ以下の者は卒族とした。

これに対して本多家と本多家家中、さらには旧府中領民が一体となって、本多家を華族とし、府中領を元通りに統治させよという運動が起こる。これが本多家家各回復問題である。

そしてその運動の過程で起きた暴動が武生騒動であり、福井藩が、この暴動を本多家家格回復をはかる本多家家中が唆した「福井藩への謀反」だと判断したので、本多家家格回復運動に奔走した武士や領民のなかから多数の逮捕者を出し、多くの死者を出した。（資料7を参照）

この死者のなかには齋藤修一郎の親族二人が含まれていた。

※大雲蘭溪：修一郎叔父・育ての親 竹内円：蘭溪の従弟

この一連の過程の中で、本多家家中は誓詞血判をなし、本多氏への忠誠を誓った。

後年齋藤修一郎はこの件を、「事成らざれば福井藩に一大打撃を加え」ようという「決議に加味し、立派に指を小柄の先で切って血判を致した」と述べ、「死を決してこの連判状に血を濺いだ」と自伝『懐旧談』で述べている（16、沼津遊学の動機）。また家老の松本晩翠の長男源太郎も後年、その「懐旧録」で「当時藩士の議論二派に分かれく之を往々赤穂の大石・大野二はに擬したりと云う>、随って反対派を罵るの声も聞え、これを犬と呼び、三岡八郎<由利公正>・松平源太郎等の名と共に罵言せらるる事なりき」と、「藩論」が二分した状況を証言している。そして15歳の修一郎自身も、沼津兵学校に留学している福井藩の重役の息子達を通じて本多家家格回復を図るために交渉する役目選ばれ、沼津に行くこととなった。

本多家家格回復問題・武生騒動は、まさに本多家家中と齋藤修一郎にとっては、「忠臣蔵」体験と言っても過言ではなく、齋藤修一郎は「忠義」に生きた武士とその家族の哀感を実体験した。

2）本多家家格問題の解決

この問題が解決したのが、1879（明治12）年の1月のことであった。1月25日、本多副元は華族に列せられて従五位となり、さらに1884（明治17）年7月8日には男爵となった。本多家はようやく大名の家格であったことが認められ、家格回復はなったのである。

しかし本多家の家格は回復され、騒動で死んだ人々の顕彰碑が本多氏や家族によって建てられていたが、「汚名」を着せた福井藩からは謝罪もなく、死者や入牢者の名誉回復はなされず、府中の人々が武生騒動について語るようになったのは、事件から50年経った、1919（大正8）年のことだ。

福井「藩」の中で府中の士民は「反逆者」の汚名を背負ったままだったのだ。

3) 本多家家格回復と『いろは文庫』の英訳：齋藤が英訳に託した想い

本多家家格回復の知らせは、直ちにボストンにいた齋藤修一郎に伝えられたはずである。

※ 運動総帥の松本晩翠：本多家首席家老・修一郎父の策順と叔父蘭溪の従兄

※ 運動に奔走した渡辺洪基：外務省大書記官（伊藤博文と井上馨の腹心）

※ 運動で入牢した高木七左衛門：本多家家老・策順と蘭溪の姉妹の夫。

当時日本からボストンへの手紙は、船便を通じて約1～3ヶ月（同級の菊池武夫と父との往復書簡による）。

随って遅くとも春には修一郎の元に知らされた。

齋藤修一郎が『いろは文庫』の英訳を決意したのは、1879（明治12）年夏だと彼の序に書かれている。また彼は1880年6月に書かれた序において、「3年前に標準的な日本の小説を翻訳しよう」と決意したと述べているので、これは1877年のこと。フィラデルフィア万博の翌年である。それから約2年も何を翻訳するのか決めかねていた（理由は？）が、1879年夏に『いろは文庫』に決めた。

彼が『忠臣蔵』を英訳しようとした直接的動機は、本多家家格問題の回復にあったと見てよい。

しかし1874（明治7）年の『英文自伝』ではすでに齋藤は、武生・沼津時代の自分は欧米に侵略されかねない日本の現状も知らずに『武士の世』はずっと続くと考える『井の中の蛙』とし、家格回復問題に奔走した自分を否定していた。そして彼、は英訳本の序でも、『仇討ち』を『愛国心の起源』と見ていたが、一方では過去の封建道徳によって縛られた行動と評価していた。

つまりこれを賞賛はしていない。

ではなぜその彼が『忠臣蔵』を英訳して欧米人に日本の代表的文学だと紹介したのか。

こう考えると、ロイヤル・ローニンズが全体として、『忠義』に生きた武士を賛美するのではなく、『忠義』に生きた武士とその家族の哀感に焦点を当てたことや、齋藤がロイヤル・ローニンズの最後に、『国外追放者の帰還』という彼の創作になる章を追加して『赤穂浪人の行動は長く歴史に記憶され、いつか天皇によって褒められる』との話を設けた意味も明らかになってくる（資料8『国外追放者の帰還』参照）。

齋藤が1879（明治12）年の夏に『いろは文庫』の英訳を決意して翻訳をはじめ、翌年夏にそれを出版した想いは、

赤穂浪人の忠義の行動は天皇によっても顕彰された。しかるに越前府中本多家の旧家臣と領民の忠義の行動は、『藩に対する謀反人』との汚名も濯がれず、今だ天皇によって顕彰されることもなく、府中の人々はこの事件について語ることなく押し黙ったままだ。いつか府中の人士の忠義の行動が天皇によって顕彰されることがあるのだろうか。いつか『赤穂義士』のように称賛されることがあれば、死んだ者やその家族の無念の想いも晴らされるだろうに

とのものだったのではないだろうか。

齋藤が英訳本『忠臣蔵』に託した想いは、封建道徳に縛られた士民の悲しさだったと思う。

しかし翻訳者の想いと、読者がその作品を受け止める仕方はまた別である。

ロイヤル・ローニンズは欧米の読者たちに、『親子や夫婦の情愛までもかなぐり捨てて国のために忠義を尽くす日本人の雄雄しい姿を活写した』ものと受け止められ、さらには後世の人たちには、『武士道』を賛美したものと讃えられた。

だがこれは、翻訳者齋藤修一郎のあずかり知らぬことである。

※次回は、『いろは文庫』の英訳③ー『忠臣蔵』英訳のテキストとして『いろは文庫』を選んだ事情と題して報告する。英訳本を精査すると、修一郎の手元には『忠臣蔵』を正確に描いた日本語の本ではなく、『いろは文庫』しか手元になかった事情が見えてくる。